房総における竈導入頃の様相

－竈と貯蔵穴　その２－

小　林　清　隆

目　　次

1．はじめに ……191

2．これまでの研究動向 ……192

3．各地域の事例検証 ……196

（1）君津地域の状況 ……196

（2）市原市地域の状況 ……199

（3）千葉地域の状況 ……200

（4）印旛地域の状況 ……200

（5）山武地域の状況 ……203

（6）香取地域の状況 ……208

4．まとめ ……208

（1）竈の導入時期について ……208

（2）竈と貯蔵穴の設置について ……209

（3）竈祭祀について ……209

5．おわりに ……210

1．はじめに

竪穴住居内の調理用火処に関する大きな変化を挙げるならば，炉から竈への移行であると断言できる。炉と竈を炊飯の際の機能面で比較すれば，竈が熱効率の点で遙かに優れていることは明らかであるし，また，竪穴住居の構築からみれば，当初から設置位置を決定しているところに大きな違いが認められる。さらに加えるならば，設置に伴い構築材が必要になったことである。

竈の初現例について，宮本長二郎氏は全国的に見れば弥生時代後期にまで遡る可能性があると指摘している[1]。しかし，古墳時代前期に九州地方から関東地方にかけて竈の出現をみるものの，その時期の普及率は，全国平均で竪穴住居数1,502に対して2.4%に設置されているにすぎないという。宮本氏の平成２年（1990）の集計では，古墳時代中期には竈は東北地方まで普及し，関東地方では竪穴住居250軒に対し４%の竪穴住居で設置が確認されて，古墳時代後期になると93%近い保有率に上昇する。一方房総における最古例は，谷旬氏が昭和57年（1982）に発表した論文の中での船橋市外原遺跡８号址が該当し，時期は鬼高期初頭とされている[2]。谷氏の集成以降，竈をもつ竪穴住居の調査例は，その集計を行うのが困難なほど膨大な件数になり，現在では竈の出現についてはいわゆる和泉期の後半と認識されている[3]。ただ，房総の各地域における初現期の実態に限れば，未だに詳細の整理がついていない状況が続いているともいえる。いずれにせよ，これからも古墳時代後期以降の集落の調査では，竈の調査が伴うことは確実であり，竈やその周辺から引き出すことが可能な情報は，まだまだ存在すると思われるのである。

さて，筆者はこれまで竈に関連して２度私見を述べたことがあるが[4・5]，そもそも竈への関心は，竈自体の調査方法の試行錯誤から始まっている。それは，使用時に立体的構造物であった竈が，調査時には構築材が流失して本来の形状が失われているケースが多く，使用の最終状態を復元するにはどのように調査して記録したらよいのか悩んでいた。調査方法については，竈について多角的に研究していた谷旬氏の方法を実行してみたり[6]，上野純司氏が日秀西遺跡で行ったような，セクションベルトを残して燃焼部や煙道をくり抜く方法を試行したりした[7]。しかし，どの方法でもそれぞれに難しさがあり，その都度抱いた疑問が次の調査で解消するということにはならなかった。

昭和59年（1984）に発掘調査が行われた沼南町大井東山遺跡の報告書の記述は刺激的であった[8]。それまで筆者は竈の調査方法や実測図作図方法にのみ関心を寄せていたのだが，今泉潔氏は住居の廃絶状況に注意するとともに，竈の廃絶状態を検証して，廃絶に当たっての祭祀的行為復元の必要性を提示したのである。この指摘は，竈の構造だけを明らかにする作業に終始苦慮していた処から，竈への対処方法に別の方向性があることを示してくれた。そして常に疑問に思っていた，「竈はなぜ完全な形では残らないのだろうか」について考える契機となった。その後千葉市荒久遺跡（１）[9]や荒久遺跡（２）[10]の調査で検出した焼失住居で，住居と竈廃棄の時間的前後関係を考え，住居を焼却する前に竈が壊されていたことを明らかにした[11]。また，千葉市種ケ谷遺跡[12]，榎作遺跡[13]の調査事例から，竈内から出土する遺物の意味と，竈と貯蔵穴が密接な関係にあることの２点について愚見を表した。前者では地域を北総地域に限定し，時期について古墳時代全般にわたって検討した結果，完全な形をとどめて発見される竈がないことと，竈から出土する遺物が竈の使用停止に伴い，掛け口閉塞を目的に人為的に置かれ直された可能性を示した[14]。また，後者では千葉市周辺の古墳時代を対象に据え，時間の経過とともに竈が設置される場所

と，貯蔵穴の位置が変化することに着目し，竈導入期は貯蔵穴に接して竈が設けられたことを推察した[15]。

小論は，これまでの対象の外にあった房総各地域における竈の導入時期を整理し，その時期の竪穴住居に限定して，第1には竈と貯蔵穴の位置的在り方を検証しておきたい。また，第2には竈に対して行われた祭祀的行為について取り上げてみることとする。なお，副題に「その2」と付けたのは，前稿からの資料の追加も目的にしているからでもある。

2．これまでの研究動向

竪穴住居やその中の竈や貯蔵穴といった施設，また竈祭祀に関しては，先学による多くの研究蓄積がある。いうまでもなく，筆者はその全てに目をとおして咀嚼するだけの力量は持ち合わせていない。そこで，上記に示した本稿の目的に関連する部分に絞って，簡単に先学の研究の一部を振り返っておこうと思う。

発掘される竪穴住居は，何らかの要因によって使用が停止された状態に近い時期の姿であり，そこから生の日常生活を導き出そうとすれば，直ぐに限界が見えてくるのは明らかなことである。例えば古墳時代に行われた竪穴住居内での祭祀活動も，発掘資料からの復元を試みようとすれば必ず無理が伴うであろう。

桐原健氏は最近まで行われていた竈神への信仰は，古代から受け継がれてきた信仰祭祀であるが，考古学的にはどう立証でききるのか，発掘事例からその遡源を見いだす試みを行った。この昭和52年（1977）に発表された論考は，極めて示唆的な内容であった[16]。桐原氏は発掘された竪穴住居で「特定の日に行なわれたであろう祭祀の痕跡を見出そうとするは難かしい」が，「だが一つ，考えられるところは竪穴住居廃棄時における竈のあり方」が唯一祭祀痕跡検出の可能性があるものとした。また，同時に竈の検出状態について「天井部は大半が崩落し去っていて，その破壊が意図的なものであるか否か俄かに判断はつき難い」と，完全な形で検出されない点にも注目している。そして竈の大半が崩落している中で，しっかりと据えられた状態の支脚や，それが抜去された状態の観察から，支脚こそが「竈神の憑代としては最適なもの」との見方を導出した。この後「支脚＝竈神の憑代」説は，竈祭祀にふれる際には必ず引用され，多くの賛同を得ていくことになる。

一方，竈出現期の竪穴住居内の施設の在り方については，柿沼幹夫氏が昭和54年（1979）時点で重要な指摘を行っている[17]。柿沼氏は出現期の竈の主軸が取り付けられた壁に対して直交せずに，さらに柱穴に対しても配慮したように傾いている点に気づかれ，竈が壁の中央から右寄りにあるものは貯蔵穴がその右にあり，逆に左に位置するものは貯蔵穴が左にあると指摘した。また，このような配置が「カマドと貯蔵穴が不可分の関係」にあり，「カマドを貯蔵穴に近接させることを優先したため」と説明した。また，竈の位置と貯蔵穴・入口の関係を概念図で示された。

笹森紀己子氏は，柿沼幹夫氏の行った竈出現期の竪穴住居集成等を基にして，埼玉県の出現期の竈について次のような5つの特徴を抽出した[18]。それは，「①かまどの位置は東壁南寄り～中央が多い。②壁への掘り込みは無いか少ない。③高坏を正立ないし倒立させて支脚に使用している。④甑の出土率は高い。⑤埼玉県の児玉，大里地方に集中して分布している。」という特徴であった。

渡辺修一氏は市原市草刈遺跡での調査から，古墳時代の竪穴住居の構造的変遷を明らかにした[19]。その中で，竈出現期の竪穴住居は竈・貯蔵穴・入口が集中して位置する型（C型）に分類される傾向が強く，

これが房総の基本型と見られるだろうとした。

竈をもつ竪穴住居が多数検出されるような集落遺跡の調査では，遺構の配置状況や遺物の出土状況，あるいは遺物そのものへ関心が向く傾向がある。個々の竪穴住居の調査も処理的な発掘になりがちで，新たな発見や発想が生まれにくいものである。各地で開発に伴う発掘調査が活発になっていた頃，中沢悟氏は鋭い視点を竈に向けていた。中沢氏は昭和61年（1986）に群馬県村主遺跡の調査報告書をまとめる中で，多くの竈が調査されているにも拘わらず，「竈の使用法を良好に物語る残りの良い竈の発掘例が極めて少ない」点に改めて疑問を感じ，「竈はこわれるのか，こわされるのか」の検証を試みた。そして人為的に「竈が，竈として機能しなくなるような作業を行っている」痕跡を提示して，「竈は，こわれるだけでなく，こわされている」と結論づけたのである[20]。これ以降この着眼は多くの研究者に支持されると共に，竈調査に当たって新たな注意の喚起を促していったと考えられる。

筆者も中沢悟氏の卓見にふれて，従来から抱いていた「大型の甕が無傷で出土しているにもかかわらず，完全な形をとどめていたカマドが皆無」であるという疑問に対し，前述のとおり古墳時代の竈を対象にその意味を探ってみた[21]。その結果，竪穴住居から出土する遺物の状態は多様な状態を示すが，竈内の出土遺物に関しては，ただ単に使用の最終段階の姿を留めているのではなく，竈の廃棄に当たって意図的に置かれ可能性が高いとという結論に達した。すなわち完形を保って出土する大型の甕や，杯や高杯などの煮沸具以外の土器が火熱を受けずに出土するのは，竈の使用停止に伴いまず竈の部分的な破壊を行い，火床面上を土などで覆ったうえ土器などを据え，さらに燃焼部に土などをつめ込むという行為が行われたと，推定復元したのである。据えられた土器の意味としては，掛け口を塞いで二度と使用することがないという意思表示として，「掛け口閉塞の表徴」で置いたものと結論づけた。だから，土器自体の遺存状態や器種は特に問題ではなく，遺物が出土することに意味があるのだという理解を示した。

飯塚武司氏[22]や栗田則久氏[23]も，平安時代の竈を取上げ，竈内から出土した土器類の出土状態を観察し，それらが竈祭祀に関わって置かれたものであると推論している。

合田幸美氏は同じ時期に「古墳時代の竈の出土状態」について集成を行い，「竈の出土状態は，多くの場合その廃棄状況を示す」という考えを示した[24]。そして「竈の出土状態から考えられる問題点には，竈の祭祀と厨房空間の在り方の２点がある」ことを提起し，竈の出土状態を次のように６類に分類した。すなわち，Ａ１＝竈本体，灰，支脚，甕形土器が完存する，Ａ２＝竈本体，灰，支脚が完存する，Ａ３＝竈本体，灰が完存する，Ａ４＝竈本体の一部と灰だけが残存する，Ｂ＝竈内に灰がない，Ｃ＝竈から杯形土器，高杯形土器，手捏土器，土玉，鏡形土製品が出土するの６類である。以上のように分類し，個々の在り方を検討した結果，「Ｃを竈の祭祀，とくに，竈の廃棄に関する祭祀と考えてよいだろう」と推察した。ただ，「Ｃについては，手捏土器や土製模造品などを竈内に配置する，竈廃棄行為が明らかな出土状態の存在に注意しなければならない。また，竈の廃棄と住居の廃棄の関連についてまとめると，竈を廃棄する特別な行為がうかがえても住居を廃棄する特別な行為は認められなかったり，逆に住居を廃棄する特別な行為は明確であっても竈を廃棄する特別な行為がない場合もある。」と多様な状態が存在し，認定に困難さが伴うことも認めている。正しくＣ類を房総の実例で探せば，ほぼ全てに関して竈の廃棄に行われた祭祀行為は確認されず，普遍性をもつとはいえなくなってしまう。だが，竈内から甕・杯・高杯などが出土することに着目した点は評価される。

堤隆氏は奈良・平安時代における竈廃絶を検証し，中沢悟氏や筆者らと同様に廃絶時に故意に竈が破壊

されたとみなし，廃絶の基本的な手順を示した[25]。また，竈出現期から竪穴住居の廃絶に伴い竈破壊が伴う事例を挙げている。なお，堤氏は竈廃棄のフローチャートを「竈の廃棄プロセスとその意味」の中で示していて，時間経過に沿った形でうまくまとめている[26]。

高橋一夫氏の竈出現や祭祀に対する考え方，またそれらを総括した上での竪穴住居内の空間利用に関する一連の研究は，発掘された資料に基づいた場合，必ずしも妥当とは言い難い部分を残すものの，竪穴住居個々から引き出される情報から，集落のそして広く関東地方を見渡した社会分析へと深化させている姿勢は注目される。高橋氏は平成３年（1991）に発表した論文の中で，貯蔵穴の位置を３タイプ５細分してその変化を辿っている[27]。それによれば，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての時期は「炉と反対側の入口のある壁のコーナー寄りにあるもの（１ａ）」が主流を占め，和泉期には「炉と反対側の入口のある壁のコーナー寄りにあるもの」（第１タイプ）と「入口と反対側の炉の寄っている壁コーナー寄りにあるもの」（第２タイプ）が混じり，特定場所に位置することはない。そして第３のタイプである「いわゆる張り出しピット」は６世紀前半にみられる独特の現象と捉えた。さらに第２タイプの竈導入段階には「カマド側の壁のコーナー寄りにあるもの（２ｂ）」が存在すると指摘した。また，「東国におけるカマドの最初の出現地のひとつである埼玉県児玉地方の住居跡では，必ずといってよいほどカマドは中心から右に寄っており，その寄ったところに貯蔵穴が存在する例が多い」と，竈が壁の中央に位置するとは限らないことと，その右側に貯蔵穴が位置することに着目した。

竈が導入されて以降の竪穴住居の発掘報告書では，竈に対して貯蔵穴が右にあるいは左に位置すると記載されるのが一般的である。その記述は事実報告としては何らの間違いはないものの，貯蔵穴のみに焦点を絞れば，竈導入以前から竪穴住居のコーナー部に設置されている事例が多く存在する。大村直氏は平成４年（1992）に刊行された市原市叶台遺跡の発掘報告書で，貯蔵穴について発言している[28]。まず，貯蔵穴の性格について，「いまだ確たる具体的な機能が特定されているわけではない」とした上で，「定型化，一般化するのは，弥生時代終末期以降であると考えられる」と判断し，「五領式期盛期において，炉の対面主軸側から，多くは南東隅に固定化される」変化を捉えている。そして「カマドの導入にともない，その脇にカマドが付設される」という，かつて柿沼幹夫氏がいった「カマドを貯蔵穴に近接させる」と同じ視点で竈の構築位置についてふれた。竈に対して貯蔵穴がどこに設置されるかという記載が目立つ中で，竈導入前の貯蔵穴の位置に視点を向けた点が逆に新鮮な発想であった。

平成４年（1992）に寺沢知子氏は竈への祭祀的行為について，具体的な内容を分類して提示した[29]。寺沢氏は竈に対して行われた祭祀的行為を，時間軸にしたがい次のようなⅠ～Ⅴの５つの行為にまとめた。すなわち，Ⅰカマド本体構築時，Ⅱカマド本体破壊，Ⅲカマド支脚の扱い，Ⅳカマド内への遺物設置，Ⅴカマド封いんである。この時間軸に沿った形の分類は，実際の検出例に則して検証可能な内容で，それまでの諸氏の示した見解をみごとに整理している。そして，「カマド廃棄時の祭祀的行為は，かけ口閉塞など住居廃棄における祭祀行為の延長上で機能し，またカマド本体構築時の様相も，地鎮祭祀的範疇に含まれるもの」なので，竈祭祀として「新たな祭祀の出現とは考えられない」として，竈神を対象とした竈祭祀を認識するには，「日常的な祭祀行為の痕跡」を探る必要性を述べている。そのような視点から，日常の竈祭祀で用いていた可能性のある杯を，支脚の上や火床の上に伏せて置く「杯伏せ型の掛け口閉塞」が，「カマド神へのカマド祭祀」成立の１つの痕跡と見なすことが可能という。この寺沢氏の論文中で，支脚の取扱いを巡り，筆者がいった支脚は当時の使用者にとって「単なる道具としての意識しかない」という

認識に対し，支脚を取り巻く民俗学的あるいは考古学的な諸例から「竈神の憑代かどうかは別にして，単なる道具として扱われていたものではなかった」との見解を示した。傾聴すべき意見であり，このことに関する筆者の現在の認識は後述することとしたい。

竈への関心が高まるのと歩調を合わせるかのように，この頃になるとようやく房総における竈導入期の主たる竈設置位置が，北壁ではないことに誰しもが経験的に気がついてくるようになった。筆者も千葉市榎作遺跡での竈の設置位置の変化を検討する中で，設定した時期区分にしたがって変化する状況が認められたので，その事実を報告書でふれた[30]。その後，資料として周辺の遺跡を加え，貯蔵穴の設置位置との関係から何がいえるか，調査事例の集成を実施し分析を試みた[31]。そして千葉市南部から市原市北西部地域の村田川流域では，竈導入期の竈設置方向は東を向く例が最も多く，貯蔵穴の保有率も88%に達し，位置としてはコーナー部に設置されるという状況が明らかになった。さらに貯蔵穴の設置場所については，竈導入前の竪穴住居と大きく変わらないので，竈は導入期にあっては「貯蔵穴に寄せて竈を作った」という分析結果を提示するに至った。そのような解釈は，それまでに柿沼幹夫氏[32]，渡辺修一氏[33]，大村直氏[34]がらが提出してあったことではあるが，一応時期区分に基づいて画期を想定したつもりである。

竈を巡っては活発な意見が提出される一方で，柿沼幹夫氏[35]，大村直氏[36]，筆者[37]などが竈と貯蔵穴の関係に従来とは別の見方を示した後も，貯蔵穴そのものに関してはやや停滞の感が続いていた。ようやく最近になり竈をもつ竪穴住居から新な情報を抽出することを目的に，多角的に竪穴住居内の個々の施設を再検討する動きも見られるようになった。高橋泰子氏は，平成11年（1999）に貯蔵穴に関する全国的な研究史にふれたうえで，武蔵国豊島郡内で検出された竪穴住居の分析例を紹介している[38]。高橋氏と同様な目的から青木敬氏も竈の廃棄を発掘事例から検討し，「竈廃棄に伴う儀礼は竈破壊以外では竈封鎖がより重要視されていた」可能性を指摘した[39]。

狩野敏次氏は，竈について民俗学的方法を中心に据えて，女性原理・母性原理のテーマを各所に盛り込んだ280頁を超す一書を著した[40]。そのはじめに「カマドはまず調理の設備であり，生活の道具である。しかし，一方では祭祀の重要な道具でもあり，カマドをめぐる信仰や儀礼もさかんに行われていた」と一書を貫く方向性が示されている。竈が古くは「カマ」と呼ばれ，「一般にカマは穴やくぼんだかたちのものをいい，カマドもまた穴に特徴があることからカマと呼ばれる」という部分など，貯蔵穴との関係でも興味深い記述が随所に見られる。

平成16年（2004）に内田律雄氏は，これまでの竈祭祀に関する研究成果の総括を行った[41]。その中で，佐原市馬場遺跡004号住居跡の竈内の遺物出土状況などは，「竈が使われなくなる時に何らかの祭祀行為が行われた」と認識できるが，「竈の廃絶が何故「竈神」を永久的に封じ込めなければならないのか曖昧」であることを指摘している。また，今泉潔氏の「史料中のカマド祭祀は，日常における吉日に行われた祭祀を物語っている例が多く，カマドの廃絶状態が，必ずしも日常生活の祭祀形態をとどめているとはかぎらないであろう」との発言から[42]，「「竈神」の祭祀と，竈の祭祀は，竈受容以前の炉との関係からも一端切り離して考えてみることが必要」であることを説いている。竈神については，酒々井町飯積原山遺跡から出土した，ヘラ書きによる人面が施された土製支脚の存在などから[43]，桐原健氏のいった「支脚に竈神が憑依する」との見解を支持し，「原始・古代の日本では支脚が竈神＝火の神の依代として神格化していった」とする。一方竈祭祀については，釜神と密接不可分の関係にあるものの，「竈そのものが祭祀の対象となるのは，西日本でも，東日本でも，竈の廃絶時のみであった」と見て，支脚については，「火

の神の宿る必要のなくなった支脚は神霊が抜かれ（魂抜き）廃棄された」と位置づけている。このように内田氏は「竈神」と「竈祭祀」を分離して捉え，竈そのものに対する祭祀行為は，竪穴住居の廃棄に伴い行われ，その痕跡のみが確認可能であるという結論を示した。

以上が竪穴住居と竈・貯蔵穴，竈に対する祭祀行為についての研究動向抄になる。

3．各地域の事例検証

かつて筆者が行った集成は，千葉市を中心に据えた地域の遺跡に限られ，補足程度に周辺地域の遺跡を取上げたにすぎなかった。ここでは千葉市地域以外の遺跡を主体にして，竈導入期からその直後に比定可能な竪穴住居を集成し，その結果に基づいて地域の状況を検証したい。それに際し，まず基準となる時間軸の設定について述べておく必要があろう。房総における竈導入時期と考えられる古墳時代中期から，後期にかけての土器編年ついては，すでに小澤洋氏が中期[43]と後期[44]それぞれ分けて構築しており，細部に異論のあることは認めるものの，大方の賛同が得られているものと理解される。そこで時間軸については小澤氏の編年案に基づいて進めることにしたい。筆者も村田川流域の古墳時代後期の編年案を提示したことがあり[45]，前回の集成ではその私案を時間軸に据えたが，房総全域を対象とした場合は小澤編年が有効となると考えられる。では小澤氏の編年について概観しておくことにしよう。小澤氏の中期編年は西上総の土器を基準に編まれ[46]，それを房総各地域に準拠して広域編年を組み立てている[47]。それによれば，前期末葉を０期として中期を１・２ａ・２ｂ・３・４・５期の６区分して７段階に設定し，３期が須恵器編年（陶邑編年）のTK73型式段階に，以下４期はTK216・ON46型式，５期はTK208・TK23型式にそれぞれ重なる。後期は０期から８期に分けられ，０期は中期編年の５期に重なり，１期は陶邑編年TK47型式に，２期はMT15型式に並行すると考えている。以下では，中４期，中５期（中５・後０期），後１期，後２期というように記していきたい。

（１）君津地域の状況

袖ケ浦市，木更津市，君津市，富津市を含む地域である。この地域における対象遺跡は鹿島台[48]，泉[49]，マミヤク[50]，野焼Ａ[51]，東谷[52]，花山[53]，子者清水[54]，道庭山Ｂ遺跡[55]の８遺跡である。抽出した竪穴住居は表のとおり№１から№41の41軒で，これを対象に検証していきたい。はじめに竈の導入時期であるが，中３期に属する須恵器を出土した君津市鹿島台遺跡DSI－022（図１－①）がもっとも早い段階の竪穴住居になると考えられる[56]。ただ，本例は現時点で本報告が行われていないので，将来に変更される可能性を残している。その後明らかに中４期に比定できるという段階の資料が見当たらず，中５期に至ると木更津市野焼A遺跡，東谷遺跡，花山遺跡などで存在が確認される。中５期段階では炉のみが設置されている竪穴住居も併存するが，後１期になると急速に普及した状況が認められる。

この中３期から後１期の間の竈は，構築材を粘土主体にして作られ，石材の使用は認められない。また，完全な形を保って検出された例は皆無である。竈の設置される方向は全体の約44％に当たる18軒が北東で，以下東が13軒，南東が４軒，南西と西が各２軒，北西と北が各１軒という結果である。貯蔵穴の保有率は高く，88％の36軒に設置が認められる。竈を正面に見てその右側に貯蔵穴がくる例が31軒，左側が５軒，

その他の場所が1軒で，4軒に設置されていなかった。竈の右側と左側に設置される貯蔵穴は，いずれも竪穴住居のコーナー部に置かれている。そのため竈は壁の中心部をずれて貯蔵穴側に寄った配置になる。入口の存在が明らかになったのは半数以下20軒にすぎないが，その中では南側が7軒で，次いで南東側6軒となっている。

記録の精粗があることを考慮に入れる必要があるが，25基の竈内から遺物の出土が認められた。出土した遺物は甕が最も多く，次に土製支脚が目立つ。遺物の内訳は表のとおりである。

次に，この地域の3遺跡5軒の竪穴住居の例を取り上げておくことにしよう。

ア　野焼A遺跡　ＳＩ059（図１－②）

木更津市請西遺跡群のほぼ中央に位置する遺跡である。調査では弥生時代後期から古墳時代前・中・後期の集落がを検出されている。

SI059は東壁に竈が置かれ，その右側に貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は南東のコーナー部に位置するので，竈は壁の中央から南側に偏った位置に構築されている。入口は竈の対向方向である西側か，南側であったと考えられる。または入口の作り替えを行った可能性ももたれる。

竈は袖部分のみが遺存する。火床部に土製支脚が正立した状況で出土している。土製支脚の検出状況を図から判断すると，火床の中に基部を埋め込んであるというよりも，火床の上に置かれたように見える。破片などのほかの遺物の出土に関しては明らかでない。

イ　東谷遺跡

木更津市中尾遺跡群の東谷遺跡は，炉の段階から竈の設置が確認できる頃の集落が検出されている。まだその全容は報告されていないが，該当する竪穴住居56軒中の24軒の状況ついては明らかにされている。ここでは竈の設置について注目される2軒の事例を挙げておきたい。

ａ．ＳＩ171（図１－③）

竪穴住居の東コーナーに竈の設置が認められ，今回の集計中では唯一のいわゆる隅竈である。出土遺物は僅かであるが，小澤編年にしたがえば，中5期に比定される。

竈本体は袖部のみが存在し，天井部の痕跡は確認できない。報告書では，竈の袖の「内側は良く被熱して」，「支脚が火床奥面に使用された状態で遺存して」，その支脚の上に杯が伏せて置かれた状態で出土している。杯の観察表には熱を受けたという記載は見られない。状況は寺沢知子氏のいう「杯伏せ型」の典型である。竈の構築位置については，通常は貯蔵穴が設けられるコーナー部に構築され，その右に貯蔵穴が検出され，位置関係が逆転しているように見える。また，入口に伴う梯子ピットが貯蔵穴に近接して存在する。渡辺修一氏の分類によるＣ型（「特定のコーナーに貯蔵穴を配し，その傍らに入口，カマドが位置する集中型」）である。しかし，本例は竈の位置の決定に，貯蔵穴の位置が優先されたであろう，とする筆者の推測からは逸脱する在り方になり，その点では興味深い。

ｂ．ＳＩ239（図１－④）

竈，貯蔵穴，入口の位置が明らかになっている竪穴住居である。小澤編年の中5期に比定される竪穴住居である。まず本住居の特徴は，竈の作り替えが行われていることである。入口は南側のほぼ中央に位置し，貯蔵穴は南東コーナー部に設置されていて，構築し直された痕跡はない。竈のみに新旧の存在が認められる。まず，最初に作られた場所は，入口の対向方向になる北壁の中央である。その後東壁に移され，その中央部に設置したと見られる。

後に構築され竪穴住居廃絶前までは機能していた東壁の竈は，袖部分のみが遺存する。火床部は袖部に挟まれた手前に形成された様子が認められ，そこからやや奥の位置から短頸壺が出土した。短頸壺は完形を保っており，口縁部を下に向けた逆位の状態で置かれていた。また，その近辺から土器片の出土も認められた。

ウ　袖ケ浦市子者清水遺跡

袖ケ浦市蔵波字鎌倉街道3,311-140ほかに所在する。遺跡の立地する蔵波地域は，養老川と小櫃川の中間地域に当たり，通称袖ケ浦台地と呼ばれ下総台地の一角を占めている。袖ケ浦台地にも幾筋かの小河川が台地を浸食している。蔵波川もそのような小河川の１つであり，本遺跡はその中流域右岸の標高50mの地点に展開する。付近には道庭山Ｂ遺跡が存在する。

調査では古墳時代中期から奈良・平安時代の竪穴住居などが検出された。古墳時代の竪穴住居は中期から後期にかけて構築され，全体で23軒が発掘された。竈について詳細な調査と記述が行われているので，養老川と小櫃川の中間地域の状況を知る上で，注目しておきたい遺跡の１つになると考えられる。

この遺跡の竪穴住居の変遷について，報告者の西原崇浩氏は，隣接する堂庭山Ｂ遺跡での成果を踏まえ，さらに小澤洋氏の編年案を参考にして６期に分けて捉えている。１期については，出土したTK23型式に比定される須恵器から５世紀末葉に想定し，２期はTK47型式並行段階として５世紀末葉から６世紀初頭段階に置いている。小澤洋氏の編年案との対比では，小澤後０期が子者清水１期に，小澤１期が子者清水２期に対応する。子者清水遺跡で中５期に比定された竪穴住居はSI013の１軒であるが，住居の北壁に竈が設置されていた可能性があるものの，保存状態が不良で全容は把握できない。後１期になると検出した竪穴住居も増加し，すべてに竈の設置が認められる。したがって，５世紀末葉から６世紀初頭までの間に，火処として完全に竈が炉に代わったと理解できる。ここでの傾向を挙げれば，完全な状態を保って検出された竈は存在しないものの，いずれの竈内からも遺物が出土している点になる。次にこの中から２軒の竪穴住居跡に注目してみたい。

ａ．ＳＩ021（図２－①）

子者清水遺跡では，竈のほかに炉も検出された竪穴住居が１軒存在する。そのSI021は，遺構内から炭化材や焼土が発見されたいわゆる焼失住居である。竈は北東壁の中心から貯蔵穴の存在する東コーナーに寄った位置にあり，中央部から南にずれて構築されている。貯蔵穴の西側には土提状の高まりが弧状に作られているが，その内側にいわゆる梯子ピットが検出されていないので，断定はできないものの，入口があったと場所の可能性は高い。そうすると南東コーナー寄りに竈，貯蔵穴，入口が集中して配置される型に含まれる。

竈の構築材は黄灰色粘土で，一部は竈の右側から前方へ流出していおり，天井部が残存していた状況は認められない。竈内の火床の奥には土製支脚の基部があり，その上に土器片がのっていた。さらにその奥には基部が欠損する土製支脚が転倒した状態で出土し，また，ミニチュア土器も出土している。火床に残っていた土製支脚の基部と，その奥から出土した支脚は同一個体である可能性が高いものの，基部の取上げに際して破損してしまい，それらの接合関係は確認できなかったとされる。基部の上に土器片がのっている状態は，筆者の考える閉塞のための再配置である。ミニチュアも廃棄に置いた可能性がもたれる。

ｂ．ＳＩ014（図２－②）

この竪穴住居は斜面に立地し，大半が調査区外に含まれて全容は知り得ないが，竈の周辺は明らかにさ

れている。竈は東壁に設けられて，南東コーナーにある貯蔵穴に寄っている。入口の位置は不明である。竈本体の天井部は遺存していない。この竈の遺物出土状況，特に煙道部の遺物の存在は興味深い。煙道が比較的長く作られ，その先端部に甕の上半部分が置かれたような状態で直立して出土したのである。さらに甕には穿孔が施されいるのが確認され，穿孔部を住居の中心方向に向けていた。住居の廃絶に伴い置いたとも考えられるが，所見では「竈封じ的な祭祀を行ったことも考えられるが明確な根拠はない」としている。甕の下部の破片が住居の他の場所から出土しているというので，上部だけを意図的に置いたことは明らかであり，類例がないものの廃棄に伴う竈祭祀の中で捉えられる行為である。なお竈内からも土製支脚とともに甕の破片が出土している。

（2）市原市地域の状況

市原市地域における対象遺跡は椎津茶ノ木[57]，叶台[58]，加茂遺跡D地点[59]の3遺跡である。抽出した竪穴住居は表の資料№42から№63の22軒である。この集成の範囲では，竈の導入時期は君津地域と同じように中5期になるが，炉を併せもつ竪穴住居は1軒確認されたにすぎない。しかし，市原市の北地域に所在する大規模な集落遺跡，例えば草刈遺跡のような遺跡で，今後詳細が報告されるにしたがい，中5期以前の竈をもつ竪穴住居の存在が明らかになる可能性は残っている。すでに報告書が刊行されている草刈六之台遺跡[60]においても，竈の出現は草刈六之台Ⅷ期，小澤編年の中5期の中と捉えられているので，現時点での出現期は中5期ということになる。

市原地域もこの時期は，構築材が粘土主体であり，石材の使用は認められない。また，完全な形を保って検出された例も皆無である。竈の設置される方向は，全体の約45%に当たる10軒が東で，以下北東が8軒，南が2軒，北と南東が各1軒という結果である。貯蔵穴は全てに設置が認められる。貯蔵穴の位置は，22軒中21軒が竪穴住居のコーナー部に設置する。また，竈を正面にして見て，貯蔵穴が右にくる軒数が18軒となり，いずれも竈とは近接する。入口に関しては不明が多い。竈内から遺物が出土しているのは22軒中の17軒である。遺物の内訳は，土製支脚が10軒から出土し，高杯と甕が7軒の竈から出土している。ほかに杯を出土した竈が4軒に認められた。この中から2遺跡の各1軒の竪穴住居の状況を取り上げておきたい。

ア．椎津茶ノ木遺跡　99号

遺跡は標高29mの台地上に立地する。古墳時代後期を中心とする多数の遺構が検出された。

99号竪穴住居は，他の竪穴住居と重複関係を有しており，保存状態は不良であるが，諸施設の位置は明らかにされている。竈は東壁に設置され，その右側に貯蔵穴が位置する。貯蔵穴はコーナー部に設けられている。竈は袖部分のみが遺存する。火床の上から甕，高杯，土製支脚が出土している。

イ．加茂遺跡D地点　208号遺構（図2－③）

国分寺台に所在する遺跡で，調査では弥生時代中期から奈良時代にかけての竪穴住居が検出されている。

208号遺構は南壁に竈を設置している。竈を正面に見て右側に貯蔵穴が存在する。貯蔵穴はコーナー部に接するような位置に配置されている。竈は貯蔵穴に寄って中心をずれている。入口は明らかでない。

竈は袖部のみが遺存する。火床部の上に高杯が伏せられた状態で置かれ，その上に土製支脚がのるような状態で出土している。竈廃絶に際して何らかの処置を施さなくては，土製支脚が高杯の脚部にのった形を保てないと考えられ，廃棄に伴う人為的処置が想定されてくる。なお，報告書では「支脚の補助として

利用されていた状態のまま残ったようにも見え，あるいは，竪穴廃絶に伴って意図的にそのようにととのえられたとも考えられる」と２とおりの解釈を示している。支脚の状態から推し量れば後者の見方が妥当であろう。

（３）千葉地域の状況

千葉地域における対象遺跡は戸張作遺跡[61・62]の１遺跡で，抽出した竪穴住居は表の資料№64から№72の９軒である。千葉地域については，すでに村田川流域に所在する遺跡について取り上げているので，今回は未分析であった都川水系に属する１遺跡に焦点を絞った。戸張作遺跡は都川の支流である葭川水系沿いの遺跡で，標高22m～26mの舌状台地状に立地する。遺跡は弥生時代中期末葉から奈良・平安時代まで継続して営まれていた。古墳時代前期からすでに集落が形成された，この遺跡における竈の導入時期は中５期になると考えられる。また，竈と炉を併せもつ竪穴住居は１軒も確認されていない。

ここの竈も構築材に石材の使用は認められないし，完全な形を保って検出された例も皆無である。竈の設置される方向は９軒のうち６軒までが東を向いている。次に北東が２軒，北向きが１軒という結果である。貯蔵穴の保有率は100％と高く，８軒までが竈の右側でコーナー部に設置が認められる。残る１軒は竈を正面に見て右後方の位置に貯蔵穴がくる。

遺物を出土した竈は８基存在する。支脚を伴う例が３基確認され，甕を２点出土した竈が２基存在するが，甕を出土した竈からは支脚が出土していない。この他の遺物の内訳については表のとおりである。次に２軒の竪穴住居を紹介しておきたい。

ａ．第３号住居跡（図３－①）

いわゆる焼失住居の状態で検出されている。竈は東壁の中心から貯蔵穴の存在する南東コーナーに寄った位置に構築されて，壁の中央部からは南にずれて位置している。西壁の中央部からやや内に入った場所に，いわゆる梯子ピットが検出されており，入口が西であったと推測される。南東コーナー寄りに竈，貯蔵穴が存在し，入口は竈の設置壁と対抗方向の壁の中央部付近という配置である。

竈内の火床部に基部を埋め込んだ状態で土製支脚が正立して出土したほか，甕の底部が１点出土している。甕の底部について出土状態は明らかでない。この竈の天井部は手前も奥も全く遺存せず，袖部が検出されたにとどまっている。炭化材も多く出土し，火を受けて竪穴住居としての機能が終焉しているのは明らかなので，その前に竈の破壊が行われたと推定することが可能である。

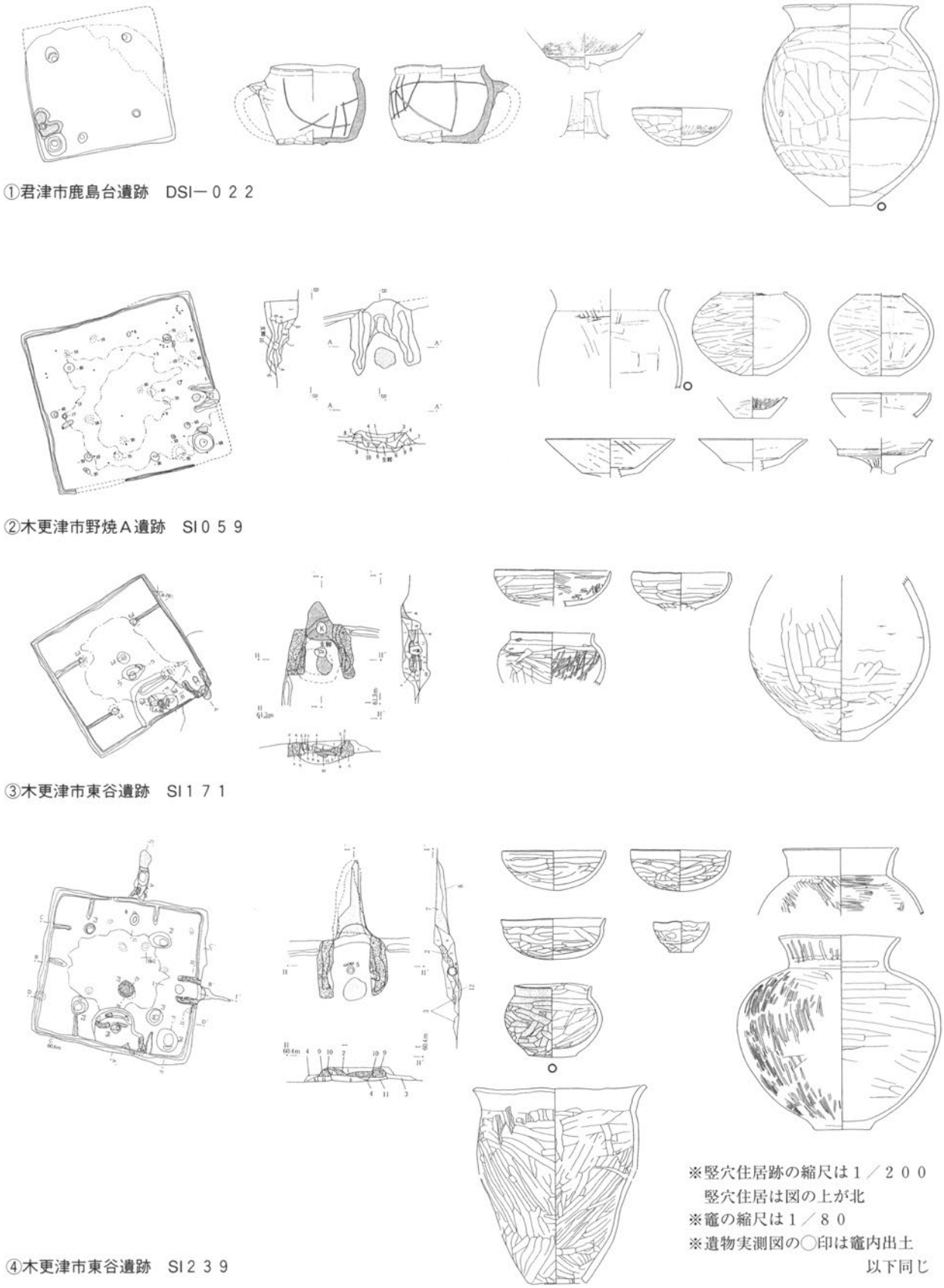
ｂ．第74号住居跡（図３－②）

比較的大型の竪穴住居で，焼失住居の可能性が高い。竈は東壁にあるが，かなり南に偏った位置である。その右側に貯蔵穴が設置されている。貯蔵穴はコーナー部に接するような形で構築されている。入口については明らかになっていない。

竈の保存状態は天井部が存在せず極めて不良である。火床の上から２点の甕，２点の甑が出土している。この中の小型の甕は逆位の状態で正立した完形の甑の中に入って出土した。支脚は伴っていない。遺物の在り方が通常とは異なるので，竈廃棄に伴って火床の上に再配置された可能性が高い。

（４）印旛地域の状況

印旛地域における対象遺跡は成田市川栗館跡[63]の１遺跡である。抽出した竪穴住居は表の資料№73か



①君津市鹿島台遺跡　DSI－０２２

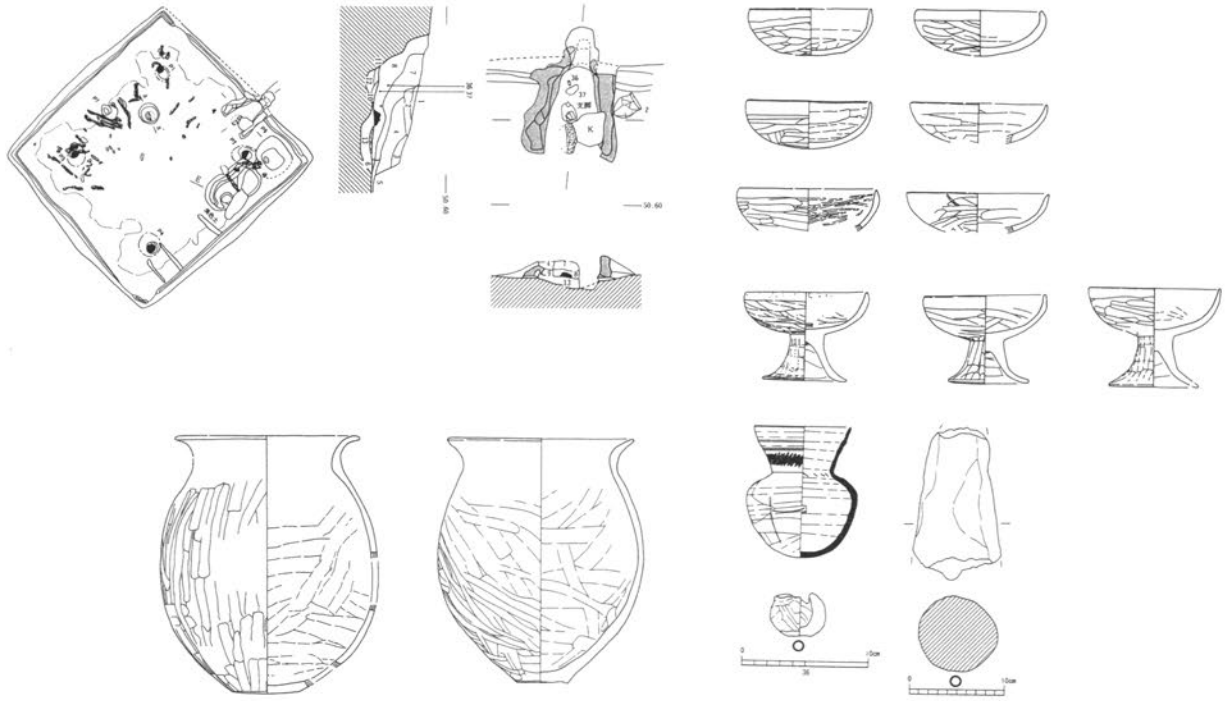
②木更津市野焼Ａ遺跡　SI０５９

③木更津市東谷遺跡　SI１７１

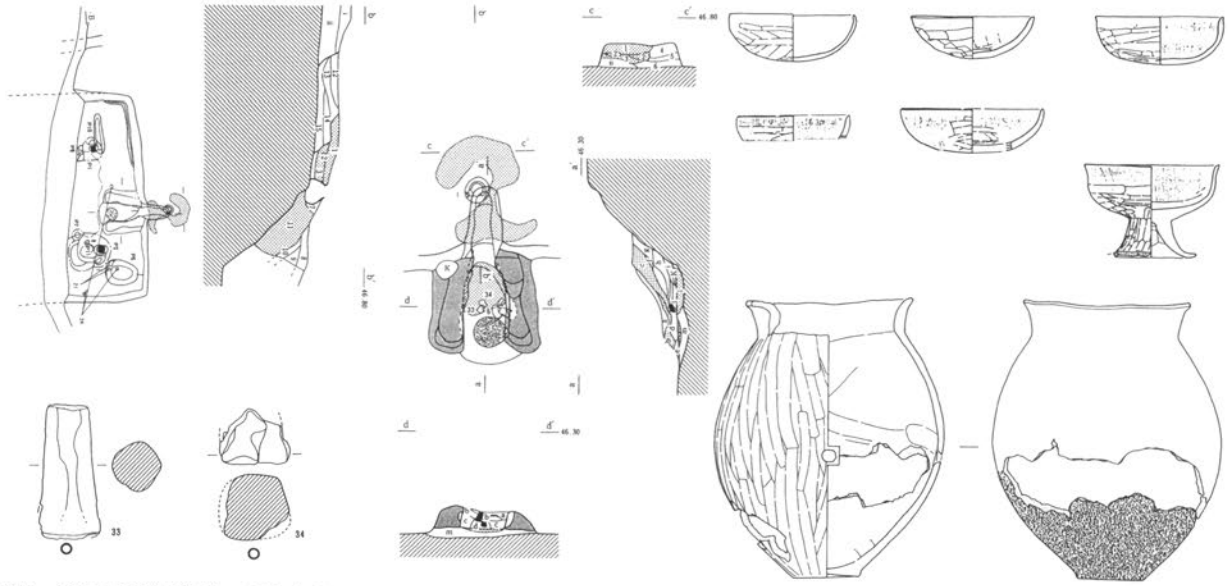
④木更津市東谷遺跡　SI２３９

※竪穴住居跡の縮尺は１／２００
　竪穴住居は図の上が北
※竈の縮尺は１／８０
※遺物実測図の○印は竈内出土
　以下同じ

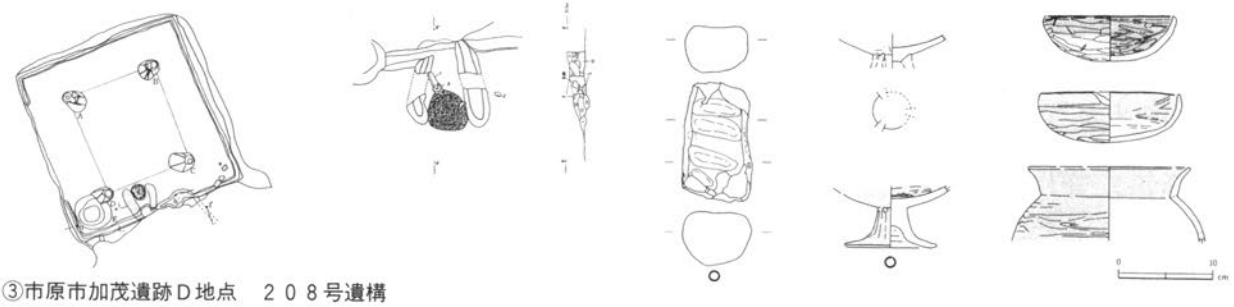
第１図　竈導入期頃の竪穴住居（１）



①袖ヶ浦市子者清水遺跡　SI０２１



②袖ヶ浦市子者清水遺跡　SI０１４



③市原市加茂遺跡Ｄ地点　２０８号遺構

第２図　竈導入期頃の竪穴住居（２）

らNo.83の11軒である。ここでの竈の導入時期は中５期の期間内と考えられるが，他の遺跡に比較し後出になるのかもしれない。竈と炉を併せもつ竪穴住居が認められないのも，そのような状況からとも考えられる。

竈の構築材は粘土主体であり，完全な形を保って検出された例は他地域同様に皆無である。竈の設置される方向は５軒が東で，北東が４軒，２軒が北西である。貯蔵穴の保有率は高く，９軒に設置が認められる。竈を正面に見てその右側に貯蔵穴がくる例が５軒，右後方が３軒，その他に竈と対向側に存在する１軒がある。竈の右側に設置される貯蔵穴は，いずれも竪穴住居のコーナー部に置かれている。入口は南東側と南側が各３軒ずつとなっている。

遺物を出土した竈は６基である。出土した遺物の内訳は表のとおりであるが，土製支脚の出土は１基であり，他地域と比べると出土率が低い傾向が認められる。

（５）山武地域の状況

山武地域における対象遺跡は山武町久保谷遺跡[64]，芝山町三田遺跡[65]，同じく御田台遺跡[66]，松尾町赤羽遺跡[67]の４遺跡である。抽出した竪穴住居は表の資料No.84からNo.96の13軒である。この地域における竈の導入時期は中５期の期間内と考えられる。小澤洋の論考中に山武地域の中５期の一括資料として，芝山町三田遺跡48住居址が掲載されている[68]。おそらくこれらが竈出現期に近い竪穴住居になるものと考えられる。この時期には竈と炉を併せもつ竪穴住居も確認され，久保谷遺跡に２軒存在する。

山武地域においても完全な形を保って検出された竈は皆無である。竈の設置される方向は東側が７軒で，北側と北東側が各２軒，南東側と西側が各１軒という結果である。貯蔵穴は全ての竪穴住居に設置が認められ，他地域と比較し断然保有率が高くなっている。貯蔵穴の位置は，竈を正面に見てその右側にくる例が10軒を占め，右後方が２軒，対向方向への設置が１軒である。竈の右側に設置される貯蔵穴は，いずれも竪穴住居のコーナー部に置かれている。入口の存在はほとんど明らかになっていない。

遺物を出土した竈の出現率も高く，13軒中12軒から出土が確認された。この地域での特色は，土製支脚や高杯よりも杯の出土が目立つ点である。次に最近の調査例から２遺跡２遺構を紹介しておきたい。

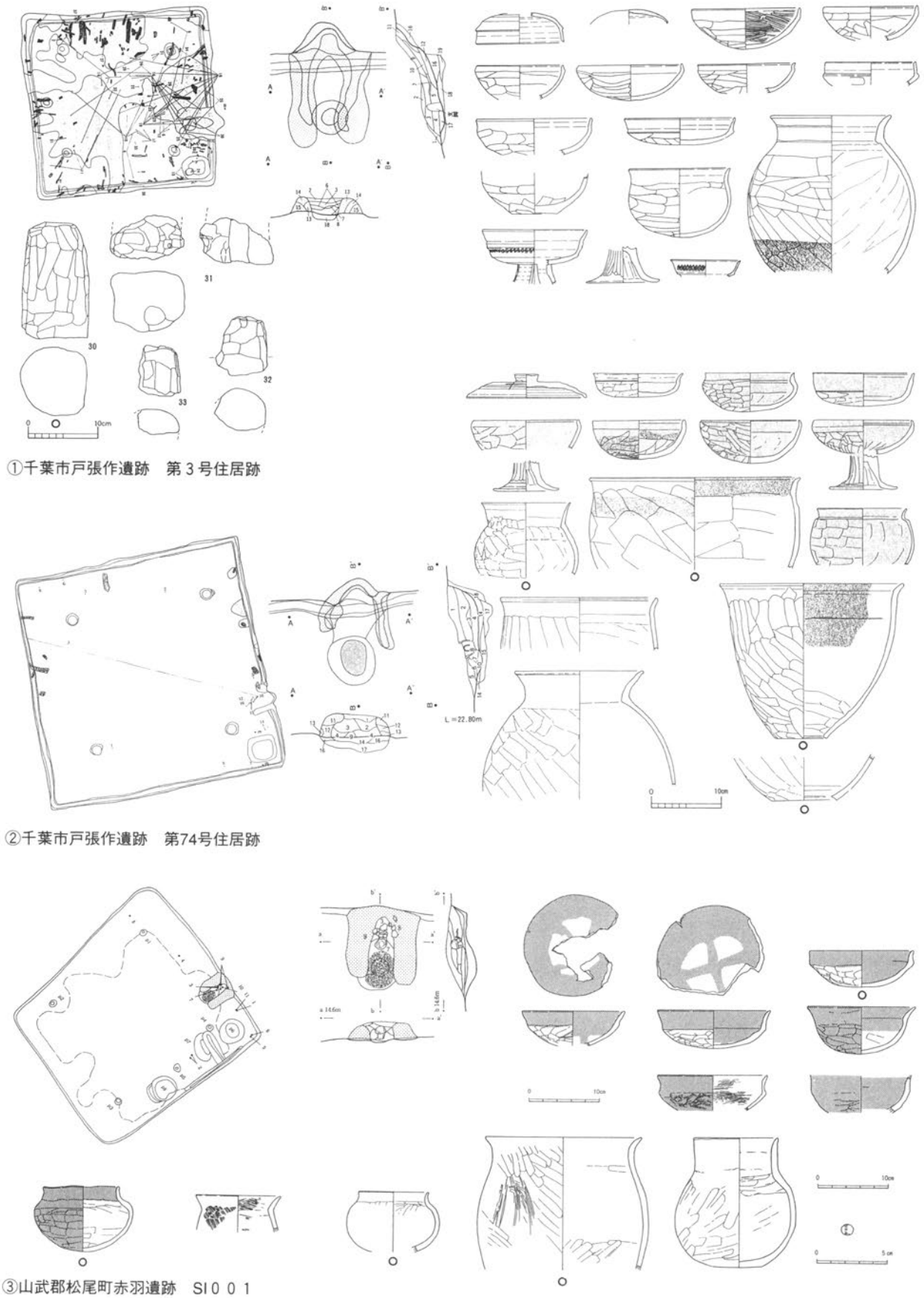
ア．久保谷遺跡　005住居跡

遺跡は九十九里平野に近い下総台地東端の境川流域の台地上に立地する。調査では古墳時代後期を主体にする竪穴住居を33軒検出している。

005竪穴住居は中５期に比定可能な竪穴住居である。遺構の一部は調査区外に含まれるが，竈は東壁の中央から南側に寄った位置に設けられている。貯蔵穴はコーナー部への設置ではなく，竈を正面に見て右後方になる南壁の中央からやや入った位置に存在する。貯蔵穴はこの東に隣接してもう１基が検出されているが，構築や使用時に時間差があるのか否かは明らかでない。コーナー部に貯蔵穴を配置しないにも拘わらず，竈は東壁の中央から南側に偏った位置に設けられており，貯蔵穴に近づけている状況といえる。この住居には炉も併設され，住居の中央部に設置に検出された。

竈は山砂によって構築され，袖部のみが遺存する。火床面からやや浮いたレベルで，杯２個体，高杯３個体，甕１点が出土している。甕の１点以外は破片の状態であり，甕と共に廃絶に際して掛け口閉塞のために再配置されたと考えられる。

イ．赤羽遺跡　ＳＩ001（図３－②）



①千葉市戸張作遺跡　第３号住居跡

②千葉市戸張作遺跡　第74号住居跡

③山武郡松尾町赤羽遺跡　SI００１

第３図　竈導入期頃の竪穴住居（３）

第１表　調査竪穴住居一覧　（その１）

地域	遺跡名	所在地	資料No.	遺構番号	規模（m）		竈設置方向	貯蔵穴			入口位置	竈内出土遺物							炉	須恵器	文献
					長軸長	短軸長		有無	住居内の位置	竈に対して		支脚	高杯	甕	壺	杯	他	無			
君津	鹿島台	君津市六手	1	DSI－022	4.7	4.7	西	有	南西コーナー	左	不明			1						TK73	56
	泉	君津市泉字壱丁目	2	19号住居	6	5.5	東	有	南東コーナー	右	西		1							TK47	49
			3	24号住居	5	5	東	無	－	－	不明							無		TK47	
	マミヤク	木更津市小浜字房谷ほか	4	50号住居址	6.9	6.6	南西	有	北コーナー	左	不明							無		TK47	50
			5	52号住居址	4.5	4.3	西	有	南西コーナー	左	東			1						TK47	
			6	93号住居址	6.7	6.1	北東	有	東コーナー	右	不明			1							
	野焼	木更津市請西字野焼	7	SI059	6.3	6.1	東	有	南東コーナー	右	西	1		1					有		51
			8	SI114	5.5	5.4	北東	有	南東コーナー	右	南							無			
			9	SI117	6.4	6.4	東	有	南東コーナー	右	南		1					無	有		
			10	SI155	6	5.9	南西	有	南コーナー	左	南			1							
	東谷	木更津市中尾字東谷	11	SI028	5.3	5.3	北西	有	東コーナー	右後方	不明			2							52
			12	SI094	5	4.7	北東	有	東コーナー	右	南西			1		1				TK47	
			13	SI096	4.7	4.7	東	有	南東コーナー	右	南							無			
			14	SI103	5.5	5.3	南東	有	南コーナー	右	南東							無			
			15	SI111	5.7	5.6	北東	有	東コーナー	右	不明							無	有		
			16	SI112	5	4.7	北東	有	東コーナー	右	不明							無			
			17	SI127	5.1	5	東	有	南東コーナー	右	南							無		TK47	
			18	SI171	4.8	4.7	東	有	南東中央	右	南東	1				1					
			19	SI178	4.3	4.2	東	有	南東コーナー	右	南							無			
			20	SI181	4.7	4.4	北東	有	東コーナー	右	南東							無			
			21	SI187	4.9	4.6	北東	有	東コーナー	右	南西	1									
			22	SI239	5.7	5.6	東	有	南東コーナー	右	南	1		1							
	花山	木更津市矢那字字花山２８１６ほか	23	33号住居址	5.7	5.6	北東	有	東コーナー	右	不明							無			53
			24	８２号住居址	5.6	5.3	東	有	南東コーナー	右	不明	1		1							
			25	１２５号住居址	5.7	5.5	北東	有	東コーナー	右	不明							無		TK208	
			26	１３６号住居址	5.6	5.2	北東	有	東コーナー	右	不明							無		TK23	
			27	１４３号住居址	6.3	6.3	東	有	南東コーナー	右	不明			1		1	1				
			28	１５３号住居址	4.6	4.3	北東	有	東コーナー	右	不明							無			
			29	１６８号住居址	5.8	5.7	北東	有	東コーナー	右	不明		1								
			30	１７０号住居址	4.5	4.4	北	有	南東コーナー	右後方	不明	1		1							
	子者清水	袖ケ浦市蔵波字鎌倉街道	31	SI014	5.5	5.5	東	有	南東コーナー	右	不明	2		1							54
			32	SI017	5.3	5.1	南東	有	南コーナー	右	南西	1									
			33	SI019	4.9	4.8	南東	有	南コーナー	右	不明			2							
			34	SI021	6.3	6.1	北東	有	東コーナー	右	南東	1					1			TK47	

（その２）

地域	遺跡名	所在地	資料No.	遺構番号	規模（m）		竈設置方向	貯蔵穴			入口位置	竈内出土遺物							炉	須恵器	文献
					長軸長	短軸長		有無	住居内の位置	竈に対して		支脚	高杯	甕	壺	杯	他	無			
君津	子者清水	袖ケ浦市蔵波字鎌倉街道	35	SI023	4.5	4.3	南東	有	南コーナー	右	不明	1	1								54
	堂庭山B	袖ケ浦市蔵波	36	001住居跡	6	5.8	北東	有	東コーナー	右	南東							無			55
			37	002住居跡	5.2	4.9	北東	有	東コーナー	右	南東		1	1	1	1				TK47	
			38	003住居跡	4.8	4.5	北東	無	－	－	不明	1		1							
			39	004住居跡	5.3	4.8	北東	有	西コーナー	左	不明		1	1		1				TK47	
			40	007住居跡	4.6	4.2	北東	無	－	－	不明			1							
			41	009住居跡	4.4	4.4	東	有	南東コーナー	右	西		1			1					
市原	椎津茶ノ木	市原市椎津５４５	42	９９号	5.5	5.5	東	有	南東コーナー	右	不明	1	1	1		1				TK23	57
			43	１３０号	4.6	4.6	南	有	南東コーナー	左	不明	1		3		1					
			44	１３７号	4.7	4	東	有	南東コーナー	右	不明							無			
			45	１４４号	4.7	4.7	北東	有	竈脇	左	不明					1					
			46	１６４号	6.6	6.5	東	有	南東コーナー	右	不明							無		TK47	
	叶台	市原市新堀８３４ほか	47	０４号遺構	3.8	3.8	東	有	南東コーナー	右	不明	1									58
			48	１０号遺構	6	6	東	有	南東コーナー	右	不明							無			
			49	３６号遺構	4.7	4.7	東	有	南東コーナー	右	不明		1	1			1				
			50	４１号遺構	5.5	5.4	東	有	南東コーナー	右	不明		1						有		
			51	４６号遺構	4.5	4.5	北	有	南東コーナー	右後方	不明			1		1					
			52	４９号遺構	3.3	3.1	東	有	南東コーナー	右	不明							無			
			53	７０号遺構	4.7	4.7	北東	有	東コーナー	右	南西		1								
	加茂遺跡D地点	市原市西国分寺台2-7-17ほか	54	４号方形竪穴住居	7.6	7.6	北東	有	東コーナー	右	不明	1	1								59
			55	１３号方形竪穴住居	4.9	4.9	北東	有	東コーナー	右	不明							無			
			56	１４号方形竪穴住居	5.2	5.2	北東	有	南コーナー	右後方	南西	1									
			57	44号方形竪穴住居	5.8	4.2	東	有	南東コーナー	右	不明										
			58	200号方形竪穴住居	6.4	6.4	南東	有	南コーナー	右	不明		1	1							
			59	202号方形竪穴住居	7.2	6	北東	有	東コーナー	右	不明	1		1						TK208・TK23	
			60	208号方形竪穴住居	4.8	4.8	南	有	南コーナー	右	不明	1	1								
			61	２１０号方形竪穴住居	4.7	4.6	北東	有	東コーナー	右	不明	1									
			62	３０１号方形竪穴住居	4.6	4.6	東	有	南東コーナー	右	不明	1		1							
			63	４０７号方形竪穴住居	5.8	5.6	北東	有	南東コーナー	右	不明	1									
千葉	戸張作	千葉市若葉区東寺山町４５１－１ほか	64	第３号住居跡	6.9	6.5	東	有	南東コーナー	右	西	1								TK208	61・62
			65	第17号住居跡	4.9	4.7	東	有	南東コーナー	右	不明			2		1					
			66	第18号住居跡	6.2	6	北	有	南東コーナー	右後方	南	1									
			67	第42号住居跡	5.3	5	東	有	南東コーナー	右	南							無			
			68	第69号住居跡	4.3	4.1	東	有	南東コーナー	右	不明							無		TK23	

（その３）

地域	遺跡名	所在地	資料No.	遺構番号	規模（m）		竈設置方向	貯蔵穴			入口位置	竈内出土遺物							炉	須恵器	文献
					長軸長	短軸長		有無	住居内の位置	竈に対して		支脚	高杯	甕	壺	杯	他	無			
千葉	戸張作	千葉市若葉区東寺山町４５１－１ほか	69	第71号住居跡	3.9	3.9	北東	有	東コーナー	右	不明					1					61・62
			70	第72号住居跡	5	5	北東	有	東コーナー	右	不明					1	1				
			71	第74号住居跡	8.6	8.5	東	有	南東コーナー	右	不明			2			2				
			72	第166号住居跡	7.7	7.6	東	有	南東	右	南	1					1				
印旛	川栗館跡	成田市川栗字波佐間213ほか	73	16号住居跡	5.5	5.5	北東	有	南東壁際	右	南東							無		TK23	63
			74	46号住居跡	6	5.9	東	無		－	西			1	1						
			75	69号住居跡	5.7	5.6	東	有	南東コーナー	右	南				1					MT15	
			76	70号住居跡	5.9	5.8	北東	有	南西	対向	南西	1				1					
			77	102号住居跡	4.5	4.1	東	有	南東コーナー	右	南					1					
			78	105号住居跡	6	5.5	東	有	南東コーナー	右	西							無			
			79	106号住居跡	6.2	5.1	北西	無		－	南東							無			
			80	111号住居跡	5.3	4.9	北西	有	東コーナー	右後方	南東							無			
			81	116号住居跡	5.9	5.2	北東	有	南コーナー	右後方	不明										
			82	123号住居跡	8.3	8.3	東	有	南	右後方	南							無			
			83	16号住居跡	3.9	3.8	北東	有	東コーナー	右	不明		2	1							
山武	久保谷	山武郡山武町戸田字東台１３３３ほか	84	００５住居跡	6.6	6.6	東	有	南	右	不明		3	1		2			有		64
			85	００７住居跡	6.2	5.8	北	有	南東コーナー	右後方	不明	1		1					有		
			86	１２５住居跡	6.5	6	東	有	南東コーナー	右	不明	1									
	三田	山武郡芝山町小池９７３	87	２７号住居址	6.1	5.8	東	有	南東コーナー	右	不明		1								65
			88	２８号住居址	4.3	4.2	東	有	南東コーナー	右	不明					1					
			89	３６号住居址	4.5	4.4	東	有	南東コーナー	右	不明					2					
			90	４８号住居址	6.7	6.7	北	有	南	対向	不明					2					
			91	９６号住居址	4.9	4.5	東	有	南東コーナー	右	南							無			
			92	９７号住居址	5.9	5.9	東	有	南東コーナー	右	不明		1			7					
	御田台	山武郡芝山町小池元高田字荒追1357ほか	93	SI017	6.8	6.5	北東	有	東コーナー	右	不明					2					66
	赤羽根	山武郡松尾町古和字牛ケ谷６５１ほか	94	SI001	7	6.4	北東	有	東コーナー	右	南東	1		2			1				67
			95	SI002	7.9	7.9	南東	有	南コーナー	右	南西	1								TK47	
			96	SI017	4	4	西	有	北東コーナー	右後方	不明										
香取	小六谷台	佐原市	97	002号住居跡	5.1	5	北	無		－	南	1									23
			98	004号住居跡	7.1	7.1	北	無		－	南			2		1					
			99	008号住居跡	5.2	5	東	有	南東コーナー	右	不明				1	3					
			100	010号住居跡	5	5	東	有	南東コーナー	右	不明							無			
			101	012号住居跡	5.5	5.1	東	有	南東コーナー	右	不明	1				1	1		有		
	境原	香取郡小見川町小見川４８６６	102	SI－５	4.9	4.8	東	有	南東コーナー	右	不明							無		TK47	70

遺跡は木戸川流域に属し，古墳時代の竪穴住居44軒が調査されている。

SI001からは須恵器模倣の土師器の杯が出土しているので，後１期に入った段階に比定される可能性が高い。竈は北東壁に設置され，その右側に貯蔵穴が位置する。竈の右にある貯蔵穴は竪穴住居のコーナー部に作られる。また，それとは別に，貯蔵穴とされる穴はほかに２か所に存在する。コーナーに設けられた１基の西側に隣接して別の１基存在し，さらにそこからやや間隔を置いてもう１基存在する。使用時に３基同時に機能していたのか，あるいは時間的前後関係をもっていたのかは明らかでない。入口は南壁の中央付近になると考えられる。

竈の袖部は比較的残存しているが，天井部の遺存は認められない。竈の火床部に土製支脚が正立し，その支脚の上に小型壺が伏せられた状態で検出された。この逆位の壺は支脚の高さ調整や，安定度を増すために置いたものではないことは明らかで，伏せていることに意味があったと考えられる。遺物はほかに接合しても完形にはならない甕２個体分の破片が出土している。

（６）香取地域の状況

香取地域における対象遺跡は佐原市小六谷台遺跡[69]，小見川町境原遺跡[70]の２遺跡である。抽出した竪穴住居は表の資料№97から№102の６軒である。現時点では，竈導入期である古墳時代中期後半から後期前葉に継続する集落調査例が少ない地域である。

竈の導入時期については，中５期になると考えられる。炉を併せもつ竪穴住居は６軒中で１軒に確認できた。竈の設置される方向は東側が４軒，北側２軒でこの２方向以外は認められない。貯蔵穴４軒に設置が認められる。４軒とも東側に竈を設置する竪穴住居で，貯蔵穴の位置は南東コーナーである。

遺物を出土した竈も４基存在する。小六谷台004号住居跡の出土状況についてはすでに紹介してたが，それは底部を欠いた２個の小型甕が縦に重ねられた状態で出土したものである[71]。

４．まとめ

（１）竈の導入時期について

以上のように，房総の６地域の遺跡を集成を行ってみた。今回も安房地域や東葛飾地域を対象に取り入れることができなかったが，いずれも隣接する地域は取り上げている。

集成の結果，房総における竈の出現は，君津市鹿島台遺跡DSI-022に見られるように中３期に遡る可能性が指摘できる。これまでのところ，確実に中３期に比定できるのは，今回の対象外地域に所在する船橋市外原遺跡第８号住居跡１軒[72]のみで，かつて谷旬氏が房総の最古例として挙げた１軒である[73]。この遺構は中村倉司氏の論考においても紹介されている[74]。ただ，その中でも述べられているように，年代を巡っては様々な意見も見られ，必ずしも小澤編年の中３期で一致するとも限らない。筆者の中３期とした根拠は，大形坩が存在することと杯が組成の中に加わっている処に依る。

仮に竈の出現が中３期の段階に，房総のいつかの集落の，ある意味特殊な竪穴住居で見られたにせよ，私見によるかぎりでは，中４期に比定可能な竪穴住居が見当たらなかったので，本当の意味での導入期は，各地域で検証できたように中５期になるであろう。小澤編年の中５期は，陶邑編年のTK208・TK23型式

とほぼ重なるので，5世紀の後葉に取り入れられ，その後，後1期の期間内に急速に普及したものと考えられる。しかし，今後の調査の中では，中3期から中4期段階の竈が検出され，その軒数が増加するという期待は，おおいに現実性がもたれるところである。

（2）竈と貯蔵穴の設置位置について

千葉市周辺や埼玉県での状況から，竈導入期の竈設置方向は東壁になる事例が多くなると推測していたが，6地域集成の結果，やはり全体の45%が東方向を向くことが明らかになった（第2表参照）。ただ各地域で東壁への設置が半数かそれ以上の割合を占める中で，君津地域のみが北東方向への設置が最も多いという結果を示した。現時点ではその具体的な理由は不明といわざるをえない。貯蔵穴の設置は102軒で95軒に認められ，設置率は93%という高い割合を示した。貯蔵穴は竪穴住居のコーナー部に設置される割合が高く，竈を正面に貯蔵穴が右側にくる多くの場合は，竈が設置される壁の中心からコーナー部へ寄った位置に竈が構築された形になる。したがって，貯蔵穴に隣接して竈が配置され，貯蔵穴の位置が竈の設置場所に大きく関与したと考えることもできる。

貯蔵穴の位置は竈導入前と大きな変化はないのに，なぜ竈が貯蔵穴と密接な関係になったのだろうか。これを考古学的に説明するには限界を感じるが，狩野敏次氏の著作である『かまど』の中の「カマドと水界」の章には示唆的な話が紹介されていて，興味が引かれる[75]。狩野氏は「火，水，カマドはいずれも女性原理や母性原理のイメージのあらわれ」であり，東北地方に伝わる竈神起源譚には，水界や水神や洞が登場するという。そして「洞と水との関係はとりわけ重要」で，「洞は穴であり」その洞や穴は「地下に想定された水界への連絡口とも考えられた」という。また，同書の「はじめに」で語られている，「カマドは古くからたんにカマと呼ばれ」，「カマは穴やくぼんだかたちのものをいい」という一節から想像すると，先行して竪穴住居内の施設として存在していたカマである貯蔵穴と，竈導入と共に入ってきた竈のもつ精神的な部分が連結し，密接な関係を構築したと見ることもできる。

（3）竈祭祀について

竈神が平安時代に各竪穴住居において信仰の対象になっていたのは，山武郡芝山町庄作遺跡[76]や東金市久我台遺跡[77]から出土した，「竈神」・「竈」の墨書土器が示すとおりである。これらの墨書土器に示された「竈神」は日常の信仰対象であったと考えられるが，導入期の資料では日常祭祀の具体的な事例は存在しない。また，竈構築時に行われたと実証できる祭祀の状況も不明である。検出した竈から想定可能な祭祀は，竪穴住居の廃絶に伴って行われた竈への祭祀行為のみである。

完全な形をした竈は，天井部に「掛け口」や「釜穴」と呼ばれる穴があるのが本来の形状である。原初的な竈には，元々天井部が作られず，袖部に囲まれた燃焼部のみがあったとする意見も見られるが，壁に接して作られた竈の初期段階から煙道部が設けられていることから考えると，天井部が存在していたと見るのが妥当であろう。しかし今回も完全な形の竈は認められなかった。房総においては，導入期の竈の構築材は山砂と粘土が主になり，石材が用いられないことから，天井部の取り壊しや移動を立証するのは難しい。完形を保ったままで大型の甕などの遺物が出土するにも拘わらず，天井部の存在が確認できない，あるいは袖部の遺存状態が不良，というような状況から推測して，竈の廃絶に際して竈を部分的に壊していることが想定されてくる。

記録や報告の精粗にもよるが，今回の集計では102軒中71基の竈で遺物の出土が認められた。器種別の合計点数は次のとおりである。最も出土点数が多かったのは甕で40点を数え，次は杯の36点になり，以下土製支脚32点，高杯21点，壺４点，その他の器種９点であった。それらの遺物が出土した位置は，掛け口が想定されるその下で，火床の上になる場合が多く認められる。土製支脚は正立した状態が一般的であるが，断面図による判断では火床部に埋め込まれた状態と，火床部の上に再配置されたような状態が観察できる。甕は完形を保っているものと，破片で出土し接合の結果完形に近くなるものや，胴部の上半部や底部のみにしかならないものがある。破片なども火床部からやや浮いて出土し，使用時の状態とは言い難く，竈本体の部分的な破壊に続く遺物の再配置が考えられてくる。また，火床面に伏せて置かれた杯なども明らかに意図的な状態を示している。筆者はこのような状態を「掛け口閉塞の表徴」として捉えている。

上に挙げた土製支脚は，単独で出土する場合と，ほかの遺物と組み合わさった状態で出土する例が存在する。それは高杯の上に伏せられた杯や壺が置かれた例で，寺沢知子氏のいう「杯伏せ型」パターンである[78]。かつて筆者は，土製支脚は「単なる道具」と決めつけていたが，寺沢氏の指摘や狩野敏次氏[79]，内田律雄氏[80]等が紹介されている数々の民俗例から考えると，前説は再考すべきと考えるに至っている。もう一度桐原健氏の説[81]に立ち返って検討してみようと思う。

竈は竪穴住居の廃絶に伴い，壊されて，遺物の再配置や土で掛け口が封印される。このような行為は，当時の人々が抱いていた，火や地や水に対する純粋な畏敬の念から発生したと思われ，だから個々の竪穴住居で行われたと考えられるのである。

第２表　竈及び貯蔵穴設置状況総括表

地域	対象軒数	竈設置方向								遺物を出土した竈	貯蔵穴設置軒数		竈を正面にした貯蔵穴の位置			
		北	北東	東	南東	南	南西	西	北西		軒数	設置率	右	左	右後方	対向
（1）君津	41	1 2.4%	18 43.9%	13 31.7%	4 9.8%	0 0.0%	2 4.9%	2 4.9%	1 2.4%	25 61.0%	38	93%	31 81.6%	5 13.2%	2 5.3%	0 0.0%
（2）市原	22	1 4.5%	8 36.4%	10 45.5%	1 4.5%	2 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	17 77.3%	22	100%	18 81.8%	2 9.1%	2 9.1%	0 0.0%
（3）千葉	9	1 11.1%	2 22.2%	6 66.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 77.8%	9	100%	8 88.9%	0 0.0%	1 11.1%	0 0.0%
（4）印旛	11	0 0.0%	4 36.4%	5 45.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 18.2%	6 54.5%	9	82%	5 55.6%	0 0.0%	3 33.3%	1 11.1%
（5）山武	13	2 15.4%	2 15.4%	7 53.8%	1 7.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 7.7%	0 0.0%	12 92.3%	13	100%	10 76.9%	0 0.0%	2 15.4%	1 7.7%
（6）香取	6	2 33.3%	0 0.0%	4 66.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 66.7%	4	67%	4 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
小計	102	7 6.9%	34 33.3%	45 44.1%	6 5.9%	2 2.0%	2 2.0%	3 2.9%	3 2.9%	71 69.6%	95	93%	76 80.0%	7 7.4%	10 10.5%	2 2.1%

５．おわりに

竈をもつ竪穴住居の検出は，発掘調査が行われるかぎり，これからも増加の一途を辿ることになる。だが問題意識をもたずに調査にのぞめば，貴重な情報が何ら引き出せずに，遺跡とともに消滅することになる。当時の社会や集落の解明には，発掘資料に基づく事実の検証が不可避であり，竪穴住居１軒から得られる資料の蓄積が意味をもつのは今後も変わらない。立ち止まって，今明らかになっていることと，そう

ではないことを思い浮かべれば，未だ不明な部分が多くあることに気がついてくる。

終わりになってしまったが，財団法人千葉県文化財センターが設立30周年記を迎えたことは，長く在籍した職員の１人として大変喜ばしいことと思っている。また，その記念論集へ小論の掲載を許諾していただいたことにお礼申し上げたい。

なお，本論の発表に際して，文献収集では（財）千葉県文化財センター図書室，（財）君津郡市文化財センターにお世話になった。また，主体的に資料収集した君津地域の遺跡については，（財）君津郡市文化財センターの戸倉茂行氏をはじめとする職員の皆様に多くのご教示いただいた。感謝の意を表したい。

引用・参考文献

1．宮本長二郎　1990「炉からカマドへ」　『季刊　考古学』第32号　（株）雄山閣

2．谷　旬　1982「古代東国のカマド」　『研究紀要７』　（財）千葉県文化財センター

3．白井久美子　1992「カマドの出現」　『房総考古学ライブラリー６　古墳時代（２）』　（財）千葉県文化財センター

4．小林清隆　1989「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号　（財）千葉県文化財センター

5．小林清隆　1997「竈と貯蔵穴」　『研究連絡誌』第48号　（財）千葉県文化財センター

6．前掲２

7．上野純司ほか　1980『我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』　（財）千葉県文化財センター

8．今泉　潔ほか　1987『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』　（財）千葉県文化財センター

9．山口典子ほか　1989『千葉市荒久遺跡（１）』　（財）千葉県文化財センター

10．小林信一　1989『千葉市荒久遺跡（２）』　（財）千葉県文化財センター

11．小林清隆　山口典子　1988「千葉市荒久遺跡の焼失住居の調査について」『研究連絡誌』第22号　（財）千葉県文化財センター

12．小林清隆　1989『千葉市種ケ谷津遺跡』　（財）千葉県文化財センター

13．小林清隆ほか　1992『千葉市榎作遺跡』　（財）千葉県文化財センター

14．前掲４

15．前掲５

16．桐原　健　1977「古代東国における竈の信仰の一面　－竈内支石のあり方について－」　『國學院雑誌』78巻９号

17．柿沼幹夫ほか　1979『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書　－Ⅲ－　下田・諏訪』　埼玉県教育委員会

18．笹森紀己子　1982「かまどの出現の背景」　『古代』第72号　早稲田大学考古学会

19．渡辺修一　1985「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」　『研究連絡誌』第11号　（財）千葉県文化財センター

20．中沢　悟　1986「竈の廃棄について」　『大原Ⅱ遺跡　村主遺跡』　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

21．前掲４

22．飯塚武司　1986「カマド内遺物出土状態の検証」　『№512遺跡　多摩ニュータウン遺跡　昭和59年度』　（財）東京都埋蔵文化財センター

23．栗田則久　1988『東関東自動車道路埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』　（財）千葉県文化財センター

24．合田幸美　1989「古墳時代の竈の出土状況」　『大阪文化財論集』　（財）大阪文化財センター

25．堤　隆　1991「住居廃絶時における竈解体をめぐって　－竈祭祀の普遍性の一側面－」　『東海史学』第25号　東海大学史学

会

26. 堤　隆　1993「住居廃絶時における竈解体をめぐって」　『山梨考古』第46号　山梨県考古学協会

27. 高橋一夫　1991「集落研究に関する二，三の覚書」　『古代学研究』125

28. 大村　直　1992『市原市叶台遺跡』　（財）市原市文化財センター

29. 寺沢知子　1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」　『考古学と生活文化』　同志社大学考古学シリーズⅤ

30. 前掲13

31. 前掲5

32. 前掲17

33. 前掲19

34. 前掲28

35. 前掲5

36. 前掲28

37. 前掲5

38. 高橋泰子　1999「貯蔵穴の研究　－武蔵国豊島郡内の竈付き竪穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について－」　『土壁』第3号　考古学を楽しむ会

39. 青木　敬　1999「竈廃棄考　－多摩市和田西遺跡からみた検討－」　『土壁』第3号　考古学を楽しむ会

40. 狩野敏次　2004『かまど』　（財）法政大学出版局

41. 内田律雄　2004「竈神と竈の祭祀」　『季刊　考古学』第87号　（株）雄山閣

42. （財）千葉県文化財センターホームページ　『房総の文化財　－これまでの主な成果　酒々井町飯積原山遺跡－』

43. 小澤　洋　1999「房総の古墳中期土器とその周辺」　『東国土器研究』第5号　東国土器研究会

44. 小澤　洋　1995「房総の古墳後期土器－坏の変遷を中心にして－」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会

45. 小林清隆　1993「村田川流域の6～7世紀の土師器の再検討」『研究紀要14』　（財）千葉県文化財センター

46. 小澤　洋　1998「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の諸相」　『研究紀要Ⅷ』　（財）君津郡市文化財センター

47. 前掲43

48. 小林清隆　2003「鹿島台遺跡」　『平成14年度千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』　千葉県文化財法人連絡協議会

49. 松本　勝　1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　（財）君津郡市文化財センター

50. 小澤　洋　1989『小浜遺跡群Ⅱ　マミヤク遺跡』　（財）君津郡市文化財センター

51. 齋藤礼司郎　2004『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅳ　－東谷遺跡－』　木更津市教育委員会

52. 酒巻忠史　2000『木更津市文化財調査集報5　－請西遺跡群　野焼A遺跡－』　木更津市教育委員会

53. 平野雅之　1988『花山遺跡』　（財）君津郡市文化財センター

54. 西原崇浩　2000『正源戸B遺跡・子者清水遺跡』　（財）君津郡市文化財センター

55. 加藤正信　1996『袖ケ浦市堂庭山B遺跡』　（財）千葉県文化財センター

56. 白井久美子・小林清隆　2002「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器　－鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介－」『研究連絡誌』第63号　（財）千葉県文化財センター

57. 木對和紀　1992『市原市椎津茶ノ木遺跡』　（財）市原市文化財センター

58. 前掲28

59. 小橋健司　2002『市原市加茂遺跡D地点』　（財）市原市文化財センター

60. 白井久美子ほか　1994『千原台ニュータウン　Ⅵ　－草刈六之台遺跡－』　（財）千葉県文化財センター

61. 菊池健一　1998『千葉市戸張作遺跡Ⅰ』　（財）千葉市文化財調査協会

62. 菊池健一　1999『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』　（財）千葉市文化財調査協会

63. 高橋誠ほか　2001『川栗遺跡群Ⅱ』　（財）印旛郡市文化財センター

64. 加藤正信ほか　2000『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書4』　（財）千葉県文化財センター

65. 福間　元・荒井世志紀　1989『三田遺跡発掘調査報告書』　芝山町教育委員会

66. 栗田則久　2004『芝山町御田台遺跡』　（財）千葉県文化財センター

67. 大野康男ほか　2003『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書12　－松尾町赤羽根遺跡－』　（財）千葉県文化財センター

68. 前掲43

69. 前掲23

70. 村山好文ほか　1999『境原遺跡』　（財）香取郡市文化財センター

71. 前掲4

72. 松浦宥一郎ほか　1972『外原』　船橋市教育委員会

73. 前掲2

74. 中村倉司　1989「関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差」　『研究紀要』第6号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

75. 前掲40

76. 松田政基　1990『小原子遺跡群』　山武考古学研究所

77. 萩原恭一ほか　1988『東金市久我台遺跡』　（財）千葉県文化財センター

78. 前掲29

79. 前掲40

80. 前掲41

81. 前掲42